

荒野の暴走ギャングと 踊るペンギン

ハリウッド映画の題名や監督の名前を聞かれたら、ほとんどの人が好きな作品や有名な監督の名前を思い出せるでしょう。しかし、オーストラリアの映画監督の名前だったら、皆さんはどうでしょう？

日本の友だちとオーストラリア映画の話題になると、ある映画がよく話に出てきます。その映画とは「マッド・マックス」(1979年)です。無秩序状態になった近未来の世界を舞台に、若き警官マックスが、妻と子どもの命を奪った暴走ギャングに敵対をするという迫力あるアクション映画で、オーストラリア国内のみならず世界中で話題を呼び、マックス役のメル・ギブソンも注目を集めました。また、続編の「マッド・マックス2」(1981年)と「マッド・マックス サンダードーム」(1985年)に描かれる全面核戦争後の世界は、多くの映画やマンガ(例えば「北斗の拳」)に大きな影響を与えています。それらの作品の監督を務めたのは、1945年生まれのギリシャ系オーストラリア人のジョージ・ミラー氏です。ミラー氏は監督や製作者として数多くのオーストラリアの映画やテレビ映画に関わっています。ハリウッド女優のニコール・キッドマンも彼の作品数本に出演し、オーストラリア国内外で知名度を高めました。

ミラー氏の作品は、オーストラリア映画協会(AFI)をはじめ、いくつもの映画関連団体に高く評価され、さまざまな賞を受賞しています。2006年に公開した最新作も、アニメ部門でアカデミー賞を受賞しました。

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲ミラー氏の作品は世界中で楽しられています

その作品とは「ハッピー・フィート」という「マッド・マックス」とはまったく趣きの違う、楽しいミュージカルアニメです。歌ったり踊ったりするペンギンのユーモラスな物語でありながら、ペンギンが生きていくのに必要な自然環境について考えさせられるメッセージも含まれている親子で楽しめる作品です。

「ハッピー・フィート」の続編のうわさもあります。が、「マッド・マックス」シリーズの4作目の話も固まってきたようなので、ミラー氏はペンギンミュージカルアニメ専門の監督になるわけではなさそうです。

オーストラリア国内で高く評価され、海外やハリウッドでも活躍して優秀な監督の一人に数えられるミラー監督。彼の作品を鑑賞して、オーストラリア映画のすばらしさを見つけてください。

みんなのひろば

調子に乗りすぎた

招待者

彼らは、日中は日差しから身を守るため、暗くて涼しい排水管に隠れています。夜になると出てきます。あちこちの家の庭の芝生に、街灯などの光が当たる場所を確保し、獲物を待ちます。時には人間のバーベキュー会場にも現れ、パニックを引き起こすこともあります。

年末、オーストラリアに帰ったとき、初めてその姿を自分の目で見ました。東海岸のゴールド・コーストにある妹の家でバーベキューを楽しんでいたときのことです。突然、姪が悲鳴をあげ、必死で愛犬を家の中に入れようとしていました。わけを尋ねると、姪が芝生の方を指差しました。示された先を見ると、カエルがピョン！ピョン！と跳んでいます。

「ただのカエルじゃん」と落着かせようとすると、妹に「あれは毒性のオオヒキガエルだよ」と注意されました。

オーストラリアのオオヒキガエルは、元々中南米に生息する両生類でしたが、1935年にサトウキビなどの害虫の根絶を目的に約3千匹が持ち込まれ、北東部の砂糖生産地に放たれました。その後、彼らの数は爆発的に増え、現在2億匹と推定されています。生息地も西へ、南へ大きく拡大しました。ゴールド・コーストの住宅街では、庭で1、2匹見られることは当たり前で、もっと北に行くと道路に数百匹のオオヒキガエルが集まることもあるそうです。

製糖業の問題を解決するために移入されたオオヒキガエルの存在自体が、皮肉にも新たな環境問題をもたらしてきました。その数の急増は、おたまじゃ

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲排水管に潜む黒い影・・・

くしの頃から皮膚に毒があることが大きな原因のようです。毒のせいでオオヒキガエルを捕食できる動物は非常に少なく、彼らの進出した地域には、特有のトカゲやヘビ、一部の有袋類の減少も見られます。家庭ではイヌなどのペットがオオヒキガエルを食べたりしないように警戒しなくてはなりません。

オーストラリアでは、この小さな招待者の絶滅を図るため、さまざまな研究が行われています。また、すでに住み着いて問題になっている地域では、住民自らの手で彼らの数を減らし、オーストラリア特有の生態系への被害をくい止めようとしています。

オーストラリアを訪れた多くの旅行者は、厳しい検疫に驚くと思います。しかし、オオヒキガエルの失敗を考えると、国特有の環境や動植物を外来生物や病気から守る必要があると感じ、検疫の厳しさが理解できる気がします。

『広報おおぶ』2008年2月1日号

日本語能力と在留資格

最

近、政府から在留資格の条件を日本語能力に依
じて緩和するという案が、発表されました。こ
の案は、日本語が堪能な外国人の在留期間が、現在の
3年から5年に延長されるとのことです。実現す
ると、就労ビザで日本にいる僕にとって、単に面倒な
ビザの更新手続きのために入国管理局に行く回数が減
るというだけでも、ありがたい話です。

この案への日本人の反応が気になったので、イン
ターネットのサイトに書き込まれたコメントを幾つか
見てみました。驚いたのは、ビザ申請時に外国人に日
本語力を求めることが「国際化の逆行」であると、政
府の提案を批判するコメントが多かったことです。外
国人に日本語力を身につけてもらうより、日本人は
もつと努力し、英語力を身につけるべきというような
書き込みも多く見られました。

このような考え方を持っているのはまだ「外国人」
英語圏からの観光客または先生」というイメージを
持っているからのような気がします。しかし現在、日
本に働きに来る外国人は必ずしも英語圏の国から来る
わけではなく、日本人が英語習得に力を入れることで
日本人と来日外国人の間の全ての問題は解決されるこ
と思えません。

日本に来てからさまざまな人たちが英語で助けよ
うとしてくれました。しかし、このようなやさしい
人たちの英語力を頼りにし、何でも代わりにやって
もらっていたら、日本語がほとんど話せないまま、
ずっと日本に住んでいたでしょう。外国人を母語で
助けることは、親切に思われるかもしれませんが、そ
れだけで本当にその外国人のためになるのでしょうか。
移民を受け入れている多くの国では、現地の言葉を

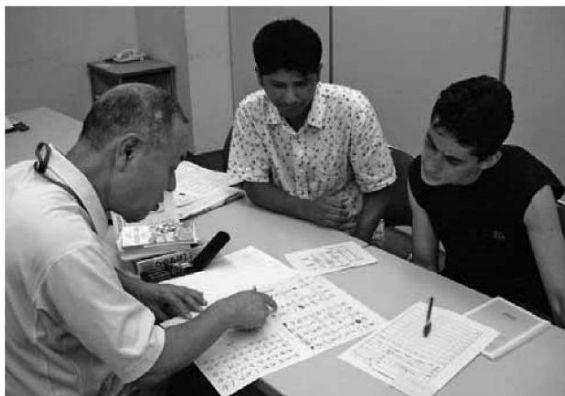
学ぶ重要さが強調されています。例えば、オーストラ
リア政府は、移民が就職など現地の社会で自立するに
は、公用語である英語が必要と強調し、全国の20カ所
以上の学習施設で、1人最大約500時間の英語授業を無
料で移民に提供しています。一方、日本に働きに来る
多くの外国人は主に地域の国際交流協会などのボラン
ティア団体によって運営されている日本語教室で勉強
している人も多いようです。(行政の責任と見られて
いる国もある中で、日本語教育の多くがボランティア
精神に支えられている日本は本当に素晴らしいです。)
日本で働いていたり、住んでいたりする外国人に日
本語力を身につけるように呼びかけることは、日本人
にとっても、外国人にとつてもいいことだと思います。
言葉の違いは日本人と外国人の相互理解の一番大きな
壁です。その壁をとりぬくために外国人の日本語能
力を向上させれば、日本人と外国人を問わず協働で明
るくて、安全で安心できる地域社会が作れると思っ
ています。

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲ボランティア団体による日本語教室

『広報おおぶ』2008年6月1日号

先住民族と オーストラリア社会

先

日、アイヌ民族を日本の先住民族として認める決議が国会でなされました。このニュースを読んだとき、何年間も日本で生活しているにも関わらずアイヌについて何も知らない僕は非常に恥ずかしく思いました。

数カ月前、小学生に母国の紹介をしていたとき、オーストラリアと言うとどんなことが思い浮かぶかと、質問してみました。1位、2位の「コアラ、カンガルー」の次にアボリジニという先住民と答えた児童もいました。ほとんどのオーストラリア人は日本の先住民族の存在すら知らないことを考えると、日本の小学生の知識の豊富さに驚きました。

オーストラリアに一度も行ったことのない日本の小学生でも、アボリジニの存在を知っているのに、ずっと日本に滞在しているオーストラリア人がアイヌのことをほとんど知らないのは何故でしょう。

オーストラリアでは、アボリジニの文化は固有のものとして認識され、観光資源にもなっています。日本国内でも、オーストラリア旅行のパンフレットを見ると、「アボリジニのディナーとダンスショー」のようなオプシオンがよく載っています。現地のみやげもの屋に入ると、ブーメランや楽器をモチーフにした飾り物など、アボリジニの文化のシンボルと思われるものも多く並べてあります。このようなアトラクションやお土産のおかげで、アボリジニの知名度が高いでしょう。これらは、海外にアボリジニの存在を知らせるにはいい方法かもしれませんが、これのみでアボリジニが尊重され、社会的立場が良くなると言えません。アボリジニの人たちが多くの困難に直面しているのも事実なのです。

オーストラリア社会においてのアボリジニに対する尊重は、一般の人たちの意識や理解に見られると思います。多くの学校などの公的施設では、オーストラリア国旗と並べてアボリジニの旗が掲げられています。ポート・フィリップ市の議会や公式行事では、最初に本来その土地が先住民のものであることの歴史的事実を認め、和解を祈念する挨拶があります。様々な分野で社会に貢献しているアボリジニの人たちや彼らが抱える問題を取り上げるテレビ・ラジオ番組が毎週放送され、小学校では先住民族に関するカリキュラムが設けられるなど、調べなくても、幼い頃から日常生活の中で先住民族に関する情報を得られるので認識が高い気がします。

これから、国内外の人びとがアイヌ民族の文化や歴史を学ぶ機会が増えることでしょう。僕もアイヌ民族への理解を深めるためにいろいろ調べてみようと思います。

アダム見聞録 ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲アボリジニの伝統的な模様が描かれたお土産など

『広報おおぶ』2008年7月1日号

アイラ I♡上海

最

近発表された国土交通省の調査の結果では、日本人の旅先への事前の期待度と帰国後の満足度を比較すると、フランスに並んで中国は、満足度が期待度を最も下回ることでした。

6月の末に、信じられない程安いツアーを見つけたので、上海に行つて来ましたが、個人的には期待度を上回り、満足でした。満足と言っても、完璧だったというわけではありません。

その理由の一つ目は、気候です。6月は、上海も日本と同じ梅雨の時期で、ツアーの初日は、ほぼ一日中雨が降り、時々土砂降りでした。午後には南京路という商店街で1時間半の自由行動がありましたが、雨具を売っている所を探すことで時間が過ぎてしまいました。ホテルに着いてから、ドライヤーなどで、必死に靴とズボンを乾かしていたら、オフィションのツアーを忘れてしまいました。残りの二日間の天気は良かったのですが、梅雨に上海を訪れようと考えている方に傘、レインコート、それから靴や靴下の替えを持つて行くことをお勧めします。

次に、土産屋で過ごした時間と博物館などで過ごした時間との割合でした。土産屋では1時間も費やさなければならぬのに対し、博物館や訪れた街では、30分間という短い時間しかなく、歴史のみならず何でも知りたい私にとって、もつとゆつくり見て回りたいところが多くありました。これがパッケージツアーの定番であると知っていながら選んだ自分が悪いのです。

拳句の果では、帰りの飛行機が欠航となったことにより、2泊の行程が3泊になったことです。空港のゲートで欠航を知った直後、みんなが慌てて職場

や家族に連絡をとっていました。しかし、不安げだったみんなの顔が、用意されたホテルでやっと夕食がとれ、その日の出来事を語り合ったら、笑顔になりました。飛行機が予定どおり飛んだら、同じツアーの参加者と楽しい「反省会」ができなかったと考えると、かえって欠航になって良かったと思えました。こんな出来事があつたからこそ、思い出に残る旅になったと思います。

上海の色々な面が見られたので、とても味わいのある旅で大満足でした。もちろん期待も、どんなところに満足を感じるかも人それぞれです。私の場合、知らない国を訪れること自体が好きです。有名な観光地だけでなく、現地の人たちの生活やその地の歴史を見たり知ること、全てが冒険です。テレビなどに与えられたイメージを捨て、自分の目で、新しい気持ちで見ることが一番いい海外旅行だと思います。再び上海に行き、ゆつくり探検したいと思います。

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲上海の生活感のある街並み

『広報おおぶ』2008年8月1日号

姉妹都市交流最新情報

今

回はちよつと宣伝です。オーストラリアのポート・フィリップ市（以下ポ市）との姉妹都市交流は今年で15周年を迎えます。

15年間毎年行っている中学生の海外派遣、ペンギン募金活動、大府市民団のポ市訪問、ポ市からの市民団の受け入れなど、色々な形で続いてきた姉妹都市交流事業に多くの大府市民の皆さんが関わり、貢献しています。これほど長く続いてきたのは皆さんのおかげです。

この記念すべき年に喜ばしい知らせが届きました。ポ市との姉妹都市交流事業の一つに職員交換派遣事業があります。この事業では、市の職員が3カ月間相手の市に派遣され、交流プロジェクトを企画・実行をします。これまで5人のポ市職員が職員交換事業の参加者として大府市を訪れ、交流を深めています。一方、大府市から6人の職員がポ市を訪問しました。今年の1月から3月にポ市に滞在した交換職員細谷健さんの「食と健康」をテーマにしたプロジェクトが、7月に開催されたオーストラリア姉妹都市協会の協議会で「文化交流賞」を受賞しました。受賞は今回で3回目、職員交換派遣事業で受賞するのは、2004年の浜島千恵美さんに続いて2回目です。1回目は、1998年にポ市内にある防波堤に生息するペンギンの保護活動の支援で英語と日本語で出版された絵本で受賞しました。

また、姉妹都市交流15周年を記念に、来年の2月上旬に訪問団を結成し、ポ市を訪れる予定です。皆さんも自分の目で見に行ってみませんか。

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲ポート・フィリップ市のセントキルダ海岸

ポ市は、オーストラリアの東南にある大都市メルボルンに隣接する海辺の街で、大企業の本拠地、商店街などがあります。広い公園や植木も多く、住宅街でも緑が溢れています。砂浜が綺麗で、昔からメルボルンの人びとに海水浴場として愛され、今でも人気の観光地です。都会にも関わらず、世界で一番小さいといわれているリトルペンギンやポッサムというリスのような有袋類動物などの野生の生き物が安心して生活しているほど、人間と自然が共生できるまちづくりに努力している街でもあります。

初めての方も、行ったことのある方も、新しい発見が必ずあると思います。この機会に多くの方に緑溢れる海辺の街の心地良さ、食べ物や飲み物の美味しさ、人びとのおおらかさをゆつくり味わっていただきたいです。訪問団の募集については、9月15日号の広報おおぶをご覧ください。

『広報おおぶ』2008年9月1日号

『日本人のお尻』と ガイドブック

旅

行で行った所や行ってみたい所をガイドブックで見るのが好きです。それは、歴史的建造物などが誰によって、いつ、なぜ、どうやって造られたかを知るため、旅行前にガイドブックでおおまかに把握しておきたいからです。また、私は英語のガイドブックではなく、細かな地図や写真などが付いていて、大変使いやすい日本の出版社の日本語のガイドブックを愛用しています。

最近、ある外国の都市についてのガイドブックを読んでいたら面白い発見をしました。それは、その国と日本との長距離列車の席や運賃の違いについての説明に「一番安い席は硬くて、日本人のお尻にかなりこたえる」と書いてあったことです。日本人であろうとオーストラリア人であろうと、お尻はお尻だと思っていた私は、読んだときに「日本人だけがその席の硬さに耐えられなくてかわいそうだね」と思いました。もちろん、そのガイドブックの著者は「日本人のお尻は外国人よりデリケート」と言いたかった訳ではありません。「〇〇国の電車の席は固すぎる」という直接的な表現ではなく、現地の人を配慮した言い方で、日本人向けに「私たちのお尻」という意味で「日本人のお尻」という表現が選ばれたのでしょう。

オーストラリアで出版されたガイドブックの場合、「オーストラリア人のお尻」という言い方は使いません。民族の多さで代表的な「オーストラリア人のお尻」は存在しないということが理由の一つでしょう。読者の国籍を想定した言い方が使えないもう一つの理由は（大英帝国のお陰で）英語が使われている

国が多いので、オーストラリアで出版された本はいずれニュージーランドやカナダでも販売あるいは出版される可能性もあるからです。

そうした英語が使われる国に対して、日本における日本語の出版物は、読者が日本人であるという前提で書かれているものが少なくないでしょう。日本語を日本人にしか理解できない暗号のように思っている人もいるかもしれませんが、日本語を使っているのは日本人だけではありません。日本に生活している外国人の増加と共に日本人以外の日本語使用者も増えているので、日本語で書かれたガイドブックのみならず、新聞や行政機関などの資料を読む外国人も増えているはずです。

いつか、オーストラリア人のお尻がどの国の鉄道の席の固さにも耐えられるかどうか、自分で試しに行ってみたいです。

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲日本人とオーストラリア人のお尻の違いについて考えるアダム

『広報おおぶ』2008年10月1日号

誰のマナー？

「マ

ナーを守りましょう」のような看板や張り紙をよく見かけることで、日本人が礼儀を大切にしていることがわかります。しかし、ただ「マナーを守りましょう」としか書いていないものに困惑させられることがあります。守ってほしいのは、食べ物を嘔んでいるときに喋らないこと？ 立てはしをしないこと？ 土足であがらないこと？ 日本人の直感力なしでは理解しにくいように思います。

私の母国を訪れたことのある方が、オーストラリア人のマナーの良さが印象に残ったと言われることがあります。話が續くと、オーストラリア人と他国の人を比較し、後者のマナーを批判し、オーストラリア人のマナーの良さを褒めていました。

外国の人々のマナーが良いか悪いかを判断するとき、日本人の「良い」マナーと想っているものは、世界共通のものという前提で判断している気がします。しかし、マナーは国によって違うものです。よく知られている例を言えば、日本では麺類を食べるときに音を立てながら食べるのが当たり前ですが、オーストラリアでは子どもが音を立てながら飲食をすると、親に思いきり叱られます。もし私の母が満席の日本のラーメン屋に入って、他の客が音を立てながら美味しそうに食べているところを見たら、心臓が止まるほどのショックを受けるかもしれません。他国のマナーが良いか悪いかではなく、ただ自分の育った国のマナーと違うだけです。そういう違いがあればこそ、海外旅行の面白さが増すのです。

日本で生活している一部の外国人のマナーが悪い

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲守るべきマナーの内容が理解できる看板

という声もたまに聞きます。しかし、ほとんどの場合は、日本のマナーがわからないだけだと思います。言葉の壁を意識する人もいますが、同じ地域の住民として声をかけることが、みんなが安心して暮らせるまちをつくる一つの方法です。外国人が日本語を学ぶ機会があると、敬語などの存在を知り、日本社会でのマナーの重要さがわかって、日本人と上手に付き合うために、どんな「ルール」を守る必要があるのかを意識してくると思います。そう考えると日本語教育は外国人のためだけでなく、地域のすべての人のためにもなります。

マナーは日本のみならず、どの国でも大事なものと

だと思います。どこに行っても、自分の常識が世界の常識という前提を持たず、相手や周りの人々に不愉快な思いをさせないように行動することが唯一の共通のマナーでしょう。

『広報おおぶ』2008年11月1日号

クリスマスの思い出

11

月1日になり、ハロウィン（万聖節）の前夜祭の飾り付けが片付けられ、日本のショッピングセンターや百貨店には、つくりものの樅（もみ）の木の飾りなど赤と緑の飾り付けに変わります。まだ2カ月弱もあるにも関わらず、洋菓子や鳥料理の注文案内や、街のあちこちに電飾が現れたり、鉄道会社のCMで有名になったあの曲もどこからか聞こえたりと一気にクリスマス（降誕祭）一色になります。

ショッピングセンターなどは、一生懸命クリスマスの雰囲気を作ろうとしますが、何故かクリスマスに伴うはずの大喜びは感じません。中喜びでもなく、小喜びと言った方がいいかもしれません。

キリスト教徒の多い私の母国オーストラリアでは、降誕祭（12月25日）は祝日で、宗教を問わずすべての人が休みます。日本に来てから、ある日残業していたら突然母から電話がかかってきました。母の後ろから何人かの笑い声も聞こえ、用件を聞くと「クリスマスで家族全員が集まったから一人であるお前に電話を…」と母に説明され、はじめてその日がクリスマスと気づいた自分がありました。そのとき普通に仕事をしていたので、楽しそうに過ごしている家族の皆がうらやましくなりました。

母からの電話でもう一つ気づきました。家族は仕事を休めただけでなく、朝からお互いにプレゼントを交換し合ったり、ハム、ソーセージやお菓子のブディング（ドライフルーツのケーキ）を食べたり、飲んだり、からかい合って笑っています。自分の家族だからこそ楽しいクリスマスだし、祖母や

両親は年老いていくので皆で楽しめるときに楽しめべき日ではないかと、目が覚める思いでした。

クリスマスは人によって過ごし方は違います。日本だと、普通に働いて残業する人もいたら、恋人同士で高級店で豪華な食事を楽しむ人もいますし、家族で鳥料理や洋菓子を食べて過ごす人もいます。なかには、無関心の人もいます。

人生の多くのことと同様、自分の理想のクリスマスの過ごし方も子どものころの経験に影響されると思います。私の場合、クリスマスの特別な思い出は家族で作りに上げたもので、それ以外では物足りません。

日本でのクリスマスを否定するつもりはありません。祝うときに、自分の好きなクリスマスの過ごし方を見つけ、大切な人と良いクリスマスを過ごしてください。

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲ショッピングセンターで見かけたクリスマスの飾り付け

『広報おおぶ』2008年12月1日号